

地球を 読む

1面の続き

渡辺博史氏 1949年生
財務省国際局長、財務
省、国際協力銀行総裁などを
経て2016年10月から現
職。経済に関する著作多数。

中間層というべき国民
は、未熟練労働者ではなく、
相応の熟練技能を有する者
が多い。新規の労働者には
能力的に勝っているという
自負があり、単に労働力の

この階層への効果的な政
策的対応が、21世紀に入っ
てから各国でほとんど行わ
れず、それぞれの所得階層
が上下移動せずに、世代を
超えて固定化されることが
多いため、「今日も明日も
俺は貧しい」「俺も子供も
状況は変わらない」という
認識が広がっている。

多くの国において高所得
階層への不満がくすぶり、
政府の無策に対する批判が
増幅してきたのである。政
府も、これに真正面から向
き合おうとせず、一因でし
かない行き過ぎた「国際化」
を全ての元凶と決めつけ、
保護主義や閉鎖主義に走る
例が増えている。

貿易競争やそれに伴う輸
入増などの結果として起こ
る勤務先の業績不振は、海
外の向こうのいわばブラック
ボックスがもたらしている
ようなものと受け止めら
れ、外国企業に対する直接
的な反発は抽象的なものに
とどまっている。

だが、他国の労働者が自
分たちの就業機会を脅かし
ていることを目の当たりに
すれば、「外に問題がある」
という被害意識を持ちやす
い。実際にどれだけ脅かさ
れているかという検証がな
いままに忌避感だけが強ま
る。それを受けて、政府が
「そもそも貿易によるモノ
の移動が問題である」とい
った身勝手な説明を付け加
えることで、モノ、ヒトの
動きの双方に反感を持つ
「反国際化」の機運が醸成
されていくのではないか。
その意味では、国内の所
得再配分政策が無策であれ
ばあるほど、国民を巻き込
んだ「アンチ多国籍主義」
の動きが増幅される。

発展に地域見渡す視点

これまでの所得再配分政
策や福祉政策は、財政上の
制約から対象を絞り込んで
きた。その結果、例えば、
上中下の所得階層を「上の
上」から「下の下」までの
9階層に分類した場合、「下
の下」と「下の中」は政策
の恩恵を受けるが、「下の
上」から「中の上」に及ぶ
階層は多くの場合、その対
象に入らなかった。

さらに、革新的技能によ
って自らの熟練分野が新し
い労働力に蚕食されざる
を得ないという認識が乏し
いため、賃金・雇用という
労働環境の悪化に対する不
満がたまりがちで、その矛
先は政府批判に容易に向か
うことになる。

供給が増えることに伴う賃
金の低下を簡単には受け入
れがたい傾向がある。

「アジア経済が良い」こ
とは事実だが、それが、域
内大国の活発な動きに感わ
されていないだろうか。他
の中小国の状況は、単に競
争の中で出遅れ、埋没して
いるだけなのか。それとも、
大国の急速な発展のあおり
を受けたものなのか。これ
らを冷静に点検しないと、
地域内の公平感を阻害し、
結果として地域の安全保障
をも損なうことになる。全
てに目が行き届いた発展の
対象空間は、国内のみなら
ず、地域全体とするのが望
ましく、それは当然のこと
ながら、世界全体の話につ
ながっていく。

間もなく「平成」が終わ
ろうとしている。平成は、
本稿で述べた課題に取り組
むのに、まさにふさわしい
時代だった。この間、日本
社会で格差の拡大がなかつ
たとは言えないが、他国に
比べれば、政府はそれなり
の対応をしており、近隣諸
国からも評価されている。
新元号は「令和」である。

そこに込められた、成分の
異なるものも一緒に溶け合
う姿を求めて調子を合わせ
ていくことは、日本のみな
らず世界共通の課題であ
る。そして、そこでは誰か
に指示される道を進むので
はなく、なごみやわらぐ佳
き姿をそれぞれが自らの発
意として求めていくことが
肝要である。

この階層分類は国民の自
己意識によるもので、必ず
しも均等に分類されておら
ず、中間層に比較的大きな
人口の塊が生じる。その多
くが「自分は国の政策の恩
恵を受けていない」という
疎外感を抱いている。

さらに、革新的技能によ
って自らの熟練分野が新し
い労働力に蚕食されざる
を得ないという認識が乏し
いため、賃金・雇用という
労働環境の悪化に対する不
満がたまりがちで、その矛
先は政府批判に容易に向か
うことになる。

貿易競争やそれに伴う輸
入増などの結果として起こ
る勤務先の業績不振は、海

その意味では、国内の所
得再配分政策が無策であれ
ばあるほど、国民を巻き込
んだ「アンチ多国籍主義」
の動きが増幅される。

間もなく「平成」が終わ
ろうとしている。平成は、
本稿で述べた課題に取り組
むのに、まさにふさわしい
時代だった。この間、日本
社会で格差の拡大がなかつ
たとは言えないが、他国に
比べれば、政府はそれなり
の対応をしており、近隣諸
国からも評価されている。
新元号は「令和」である。

そこに込められた、成分の
異なるものも一緒に溶け合
う姿を求めて調子を合わせ
ていくことは、日本のみな
らず世界共通の課題であ
る。そして、そこでは誰か
に指示される道を進むので
はなく、なごみやわらぐ佳
き姿をそれぞれが自らの発
意として求めていくことが
肝要である。

英文はあすのジャパン・ニ
ューズに掲載する予定です